

エリック・アザン著（以文社・4725円）

花の都、パリについての本である。世界で最も人気のある観光都市。その石畳に刻まれた近代史を、街をぶらっと散策しながら拾い上げたような書きぶりの、異色のパリ案内だ。

全編、ボードレールやベンヤミン、バルザック、マネ、ドガ、ピカソ、ドアン、アジェといった芸術家らの文章の引用や作品への言及を街路の紹介に交える。街でばったり彼らとすれ違ったようで、飽きが来ない。

さらに特徴的なのは、第一部の「赤いパリ」だろう。フランス革命、マルクスに影響を与えた19世紀のパリ・コミュニケーション、第二次大戦のレジス

タンス、そして世界の若者叛乱はんらんの発火点となった「五月革命」……。鮮烈なバリケードの年代記は、そのまま、一種のパリ民衆史にもなっている。

著者は、若き日にアルジェリア独立を支援し、その後もプレスチナ解放運動に関与するユダヤ系の外科医。自ら立ち上げた人文系の出版社も経営しているという。単に街の美しさ、華やかさだけを記さず、しかし、パリとそこに生きた人々を肯定する筆致の背景に、著者の人生も影響しているのだろう。普通の観光案内本に飽き足りない旅人は、ぜひご一読を。

|| 杉村昌昭訳(生)